

論文題目「尾崎翠 砂丘の彼方へ」

氏 名

川崎賢子

【目次】

| | |
|-----------------------------------|-----|
| はじめに・・ | 1 |
| 第一章 歩くことと書くこと—初期散文から「歩行」まで | 23 |
| 1 一九三一年「歩行」—方法としての歩行 | 23 |
| 2 初期散文から—境界を歩く | 37 |
| 3 漫想的彷徨—慕進と隠遁 | 46 |
| 4 歩行と彷徨—眼・耳・鼻の散歩 | 56 |
| 第二章 兄の知と妹の変奏—ナンセンス・ユーモアの方へ | 83 |
| 1 科学する兄たち—「第七官界彷徨」「地下室アントンの一夜」の遠景 | 83 |
| 2 受容器としての唯識—現象学・進化論・心理の遺伝 | 100 |
| 3 浮遊する分身と分心—漫想家的彷徨 | 119 |
| 第三章 めくるめく「七」の世界—「第七官界彷徨」 | 149 |
| 1 「七」とは何か | 149 |
| 2 第七官界という次元—感覚のモンタージュ | 159 |
| 3 おもちゃ箱の哲学—ミニアチュールと映像 | 176 |
| 4 第七官界と映画官 | 193 |
| 第四章 転生する「小野町子」 | 211 |
| 1 禁忌の境界 | 211 |
| 2 変な家庭—尾崎翠と「変態」現象 | 231 |
| 3 家のなかの「女の子」—少女領域の拡大と転位 | 243 |
| 4 孫娘と祖母—百歳の老女、千歳の少女 | 273 |
| 5 あらかじめ失われた恋人たち—恋愛／小説の生成 | 293 |
| 第五章 読む女、書く女、書かれた女 | 331 |
| 1 読みかえる女 | 331 |
| 2 ためいきと言葉のあいだ | 352 |
| 3 「こほろぎ嬢」—書く女と浮上する「母」 | 372 |
| 4 書かれた女—ゴルゴーンの姉妹たち | 395 |
| おわりに—柔かい海 | 435 |

【論文の要約】

尾崎翠（一八九六—一九七一）は、没後いっそう評価が高まり、近年これを研究対象とする論文が少なからず発表されている。一九七九年創樹社版『尾崎翠全集』、一九九八年筑摩書房版『定本尾崎翠全集』が上梓されたのちも、複数の出版社から流布本が刊行され、かたわら初期作品の発掘も続いている。舞台、映画など隣接メディアにおいてもとりあげられた。

尾崎翠の表現は、独特の比喩、イメージ、パロディーなど知的なたくらみにみちた造形を特徴とするが、おしむらくはそれを論じる者が、尾崎の独自性を特権化し、時に作家を神格化し、文芸の表現の歴史のなかで孤立的に扱いがちな傾向にある。その表象と言説を文芸史に位置づける試みは、作家像の相対化にも関わる。

本研究の目的は、尾崎翠が作家として活動したアーリーモダンから昭和モダニズム期にかけての文芸思潮を読み直しつつ、尾崎翠の表象と言説の成り立ちを歴史的に評価する方法を探ることである。

主論文は公刊に際して『尾崎翠 砂丘の彼方へ』（岩波書店、二〇一〇）と副題を付した尾崎翠研究である。第一章では初期散文から「歩行」（一九三一）にいたる、「歩く」すなわち書く者の視点の移動に連れて変容する風景と心象を書くという方法について考察する。

一九一〇年代の習作期に、尾崎翠は、雑誌の「短文」「小文」欄に投稿を始めた。正岡子規「叙事文」（一九〇〇）の提唱以後、『ホトトギス』誌を中心に「写生文」による短文、日記を書くことが奨励されていたが、自然のなかを歩みつつ書く方法は、移動しながら感覚の渦としての〈私〉を再編する方法でもあった。移動しながら〈私〉と世界の関係の変容を捉える散歩、漫歩、彷徨といった方法は、来たるべきモダン都市空間における遊歩者の方法に連続する。

一方には意識の境界から内奥へとめぐらされる瞑想的なまなざしも初期散文から特徴的にはたらいっている。その瞑想は写生の限界を越える象徴主義的観照であった。尾崎のテキストは一九二〇年代以降、メディアに接続しつつひきこもる、社会的な役割関係を絶ちつつ時間の流れのなかで生起し移ろう意識の流れにおいて外部に連なるといふ、現代的に閉ざされ／開かれたありようを綴っている。本章ではそこに至る尾崎翠の表現の位相の飛躍について、歴史的に考察する。

第二章では尾崎翠の文学における知的意匠について考察する。現象学、精神分析学、進化論、遺伝学など、同時代の新しい知見がパロディー化されつつテキストに織りこまれ、独特のナンセンス・ユーモアを醸し出している。それらの知見がどこから得られたものか。またその受容と消化および変奏にあたって、どのような種類の教養がはたらいたか。本章では新仏教の動向ととくに唯識の概念に注目し、尾崎翠文学における生命観、宇宙観、心理学の特徴を分析する。

第三章では「第七官界彷徨」（一九三一）を精読する。モダニズム文学における対象の数

値化および記号化について、五官を越える「第七官」という概念に見出される諸感覚のモニタージュおよび共通感覚の歴史的意味についてそれぞれ考察する。とくに感覚の変容を、二十世紀の映画メディアがもたらした感覚の再編、まなざしと身体像の変容との相関において論じる。

第四章では尾崎翠文学における〈少女〉表象と言説について、ジェンダーおよびセクシュアリティ研究の方法を援用しつつ考察する。尾崎翠のテキストは成人男女の異性愛の関係にはおさまりきれない欲望が記されている。また「変態」言説が戯画化されつつ濫用される。片恋、失恋としてのみ意識される恋愛、家族親族のなかの異性としての兄妹・従兄妹たちなど、生殖行動にたどりつくことのない関係性と心身の揺らぎが表象される。戯曲を読みかわすうちに、戯曲のなかの恋人たちの欲望にならうかのように募る欲望が語られもする。他者の欲望するものを欲望する〈私〉は、生身の男女を欲望するのと同じような切実さをもって、メディア化された身体を欲望し銀幕のスターを思慕する。

先行研究においてはジェンダーおよびセクシュアリティの視点からの分析は活発になされている。ただし水田宗子『尾崎翠「第七官界彷徨」の世界』（新典社、二〇〇五）、塚本靖代『尾崎翠論 尾崎翠の戦略としての「妹」について』（近代文芸社）、江黒清美『「少女」と「老女」の聖域』（学藝書林、二〇一二）などがテキスト解読の概念として〈家父長制批判〉を用いたことは当然のことではあるものの、昭和モダニズム期文芸における家父長制と脱異性愛の欲望の交錯のダイナミズムは、まだ分析しつくされていない。本論では、文化研究の知見を援用しつつも自立的な文学表現のダイナミズムを問題にし、〈変態〉言説とそのパロディーや〈少女〉領域の拡大と転位、〈少女／老女〉イメージの通底と逆転、テキストの引用関係、古典の引喩などに着眼する。物語内容から抑圧と解放という二項対立図式を抽出するのにとどまらず、テキストの生成、引用と変奏など、読む行為、書く行為を焦点化することによって、二項対立の境界の引き直しや、意味のずらし、反転などが生じていることを指摘する。

第五章では、読み書きする者のジェンダーについて考察する。尾崎翠のテキストはしばしば読むひと、書くひとを焦点化して綴られる。また（小野）「町子」を視点人物あるいは語り手としたり、なんらかの形で話題に上せたりするテキスト群が残されており、パステイシューやパロディーを用いつつ、カノンおよび文学史からの女性の読み書きの疎外を表象している。

また「こほろぎ嬢」（一九三二）をはじめ複数のテキストにおいて、ウィリアム・シャープとフィオナ・マクロード（William Sharp、Fiona MacLeod、一八五五 - 一九〇五）への言及がある。男性名ウィリアム・シャープとしてはケルト文学運動にたずさわった批評家であり、女性名のフィオナ・マクロードとしては神秘主義的および象徴主義的な作家であったこの人物の著作は、尾崎の同時代においては松村みね子（片山 廣子、一八七八 - 一九五七）によって翻訳紹介されていた。近年では異性として書くという行為について（有

元志保『女と男を生きた作家』国書刊行会、二〇一二)、日本文学に及ぼした影響について(鈴木暁世『越境する想像力 日本近代文学とアイルランド』大阪大学出版会、二〇一四)、研究が進められている。尾崎翠は、このウィリアム・シャープとフィオナ・マクロードとの間に「恋」という関係性を仮構して「こほろぎ嬢」の物語を進める。「こほろぎ嬢」と呼ばれる無名の読み書きする女性は、ウィリアム・シャープとフィオナ・マクロードとの間に交わされる架空の〈恋〉を欲望しつつ、その欲望は、複数の〈母〉の表象と対照させられ、相対化される。

参考論文「映画へ／映画から--尾崎翠の文学的転機--」は、初期習作からモダニズム期の表現の変容の転機としてとくに映画メディアとの関係に焦点をあてる。

一九二〇年代から三〇年代にかけて、先端的な小説表現が映画という新しいメディアに触発された時期に尾崎翠は、少女小説ジャンルのテキストにおいてカメラ・オブスクラが映し出すミニアチュールの風景を描き、映画台本「琉璃玉の耳輪」(一九二七)を書き、映画批評にして文芸批評でもある「映画漫想」(一九三〇)を連載している。(未刊草稿の「琉璃玉の耳輪」については、参考論文『第七官界彷徨・琉璃玉の耳輪他四篇』〔岩波文庫、二〇一四〕において本文校訂と流布本としての本文づくりをあわせて行った)。「琉璃玉の耳輪」には、大アジア主義、シオニズム、ガンジーの政治運動など同時代の社会思想や国際関係が時代背景として配され、探偵、異性装、嗜虐被虐の性愛、狂気、監禁などのトピックが記されている。それらのトピックはエログロそしてナンセンスと称された昭和モダニズム期の風俗の先端的な事象であり、尾崎は映画台本においては小説よりはるかに素材の選択に関して大胆でありアクチュアルであった。もとより映画の時間および語りと小説のそれとの構造的な相違があり、「琉璃玉の耳輪」分析だけでは、尾崎の後期小説テキストにおける諧謔や哀感、ノスタルジア、喪失感、想起と忘却等々といった特質を解くことは難しい。喪失と追憶の身振りについては、本論文第四章第五節に言及したように、欲望の構造とも結びついている。

参考論文「尾崎翠の表現主義受容と変容--文芸史における位置づけ」は、アーリーモダンからモダニズム期にかけての文芸の諸思潮のなかに尾崎翠を位置づける考察である。尾崎翠は一九二〇年代初頭鳥取における文芸運動、アマチュア演劇上演を通じて表現主義を受容し、ドイツ表現主義映画、演劇の鑑賞を通じて理解を深めた。同時代の文芸思潮をたどるなら、日本の表現主義は後期自然主義以降の、象徴主義、印象主義と隣接し、主客の対立を克服する認識と表現の試みの一環にある。尾崎翠の表現は、一九一〇年代の初期散文から三〇年代にかけて大きく変貌を遂げ、そこに後期自然主義から象徴主義・印象主義および表現主義にいたる同時代文芸思潮の流れを汲む画期を指摘することが可能である。ただし尾崎翠は表現主義をより狭義に、自然主義批判として、対象の変形、抽象化、エロテシズムの変容においてその方法の有効性を見出していた。尾崎翠の表現主義受容は、文体のパロディ、ナンセンス・ユーモアの手法とも結びついている。

イメージと語りの変化に加え、表現主義映画演劇体験を通じて、尾崎はメディア社会におけるまなざしの変容--たえざる刺激にさらされつつ舐めるように触れるように見ることについて、隔てられながらも主客の境界を逸脱する感覚について、時代に先駆けた考察を示したといえる。